シリーズ 特別支援教育

「共に学び、共に生きる」ことを考える

1月24日(土)の「滋賀の共生社会づくりに向けた県民フォーラム」では、会場となったびわ湖ホール（小ホール）に、240名の参加者を迎え、盛大に県民フォーラムを開催することができました。県のモデル事業についての取組報告とパネルディスカッション、講師の金澤翔子さん、泰子さんによる書のパフォーマンスと講演などの内容で展開したこのフォーラムは、閉会後に、金澤翔子さん、泰子さんとの写真撮影も行われるなど、最後まで温かな雰囲気の中で進められました。

<インクルーシブ・アートプログラムモデル事業の取組報告とパネルディスカッション>

前半は、今年度の県教育委員会の新規事業、特別支援学校と小中学校による造形活動を通した共に学ぶ取組（インクルーシブ・アートプログラムモデル事業）についての報告と、4人のパネリストを中心とした意見交流が行われました。（左下写真）その中で、特別支援学校の児童のダイナミックな作品に小学校の児童が思わず感嘆の声をあげたエピソードなどが紹介され、障害のある子とない子が共に学ぶためにアートが果たした役割について考えあうことができました。

パネリストの滋賀大学の大嶋彰教授は、「アートとは、既成の概念に捉われず新たな意味を創り出すものであり、異なるものを排除するのではなく受け入れる中で生み出されるものである」と話され、アートの力は、障害のある子とない子が共に学ぶインクルーシブ教育に大きく寄与できるとまとめられました。（詳細は、右横の記事をお読みください。）

<書家・金澤翔子さんによる書のパフォーマンスと、母・泰子さんによる講演>

後半は、講師の金澤翔子さんによる席上揮毫（きごう）（書のパフォーマンス）からスタートしました。登壇直後に精神統一をする翔子さんの姿に、会場は一気に静まり、その後、力強く筆を進め、最後の落款で「共に生きる」の書を完成させた翔子さんに、参加者たちは心を揺さぶられ、思わず涙ぐむ方もおられたようです。（写真右下）

引き続き行われた母・泰子さんによる講演では、「書」というアートをとおして翔子さんと共に生きる中で、障害を受け入れていくことのできた自分の変容をお話しいただき、「世界一悲しい母親」であった自分が、「世界一幸せな母親」に変わったという言葉で講演を締めくくられました。終了後に寄せられた多くの感想の中から、その一つを紹介したいと思います。「共生社会とは、どんな立場の人も、生まれ暮らしているところで、堂々と生きていける社会だと思う。今回考えた『インクルーシブ』が、それにつながるよう一市民として私も考え、行動したい。」

専門家から一言

「アートはもともとインクルーシブである」

滋賀大学教育学部
教授 大嶋 彰

「アート」と聞くと、高度な専門性を必要とするような印象を持たれる方が多いかもしれません。しかし、決してそうではないのです。「アート」は、私たちが当たり前と思っていることをもう一度見つめ直し、捉われがちな既成の概念をリセットする中でつくられるものです。素材と一体になって、自分を忘れ無我夢中にかかわる、そこから生まれてくる新たな意味生成こそが「アート」なのです。そして、私たちが忘れてしまいがちなそういったことを心の中に呼び戻してくれたのが、今回のインクルーシブ・アートプログラムです。特別支援学校と小中学校の子どもたちが、本物の芸術にふれ、共に学びあう取組の中で、「アート」が一人ひとりの感性をひらき、互いの存在を尊重しあう気持ちを育んでいったように思います。

「分離」していくことの多い教育という分野において、障害の有無を超えて子どもたちを包みこむ「アート」の力がますます重要な意味を持っている気がします。インクルーシブ教育を進める上で「アート」が果たす役割を、みなさんと一緒にこれからも追究していきたいと考えています。

問合せ先 学校支援課 ☎077-528-4643